ing(進行形)

ぷなな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ｉｎｇ（進行形）

【Ｎコード】

Ｎ０９８７Ｃ

【作者名】

ぷなな

【あらすじ】

ある男女の出会いから、現在に至るまでの物語。※読んだ方は評価のほうよろしくお願いします。

1．出会い（前書き）

この話は筆者の実体験をもとにして作った小説です。ただ、登場人物は実名ではありません。

1．出会い

「…暇だぁ」

ごく普通な高校生である俺は、毎日がつまらなく感じていた。何をするにも無気力で、ただ1日が過ぎるのを待つ…そんな毎日を繰り返していた。

その日もやることがなく、自分のベッドの上でネットサーフィンをしていると、ある掲示板に出会った。そして、こんなスレを見つけた。

『あなたの恋愛観は？』

何気なく覗いてみると、たくさんの書き込みがあった。そんな中、ある書き込みに目がとまった

『相手のことを考えれないようなヒトは嫌だなぁ…。』

よくありそうな書き込みだが、なぜかひかれてしまった。

『それ、よくわかるぁ～』

と、思わず書き込んでしまった。なぜだか自分でも理由はわからない。

すぐに、それに対する書き込みがあった。

『外見ばっか気にするヒトがいるけど、それは自分のことしか考えてないと思わない？』

まさにその通りだと思い、すぐに書き込んだ。

『全くもってその通り。てか、なんか気が合うねぇ（笑）』

「ぁ…このヒトが男か女かわからないじゃん（笑）」
書き込んでから気付いた。ただ、なぜかわからないが女であるという自信があった。

『たしかに（笑）なんかあうねぇ♪』

『もしかして運命かな？（笑）』

『ぁはは（笑）』

『ちなみに俺は男ね（o＾―'）b』

『私は女だょ（´∀、＊）』

…ほらね（笑）

俺はその素性のわからないヒトと他愛のないやりとりを続けていた。
そんなとき

［なんか仲いいみたいだから2ショットチャット行けば？ずっとここでやりとりされたら、他のヒトが書けないし。］

という書き込みがあった。

『どーする？』
『たしかに邪魔になるからいこっか（笑）』
という単純なやりとりで2チャに行くことになった。
2チャにて
『改めてどーもです（笑）』
『こちらこそ♪』
『せっかくだから名前教えてー（笑）』
『いいケド、そっちからね♪』
『俺はコウキ、○○高1ね☆』
『私はユリ、高2だょ♪ちなみに○○高だから一緒だね（笑）』
『ぇっ、年上だったんですか？そうとは知らず、タメ口ですいませんでした←←』
まさか年上だったとは…。しかも同じ高校…（笑）
『タメ口でいいょ♪堅苦しいの嫌いだしwwてか、チャットめんどいからアド教えてょ☆』
『ぁ…ぁぁ、いいっすょ。俺のアドはこれです・・・』

『じゃあ、メールに切り替えるねぇｗｗ』

メールにて

俺は、本当にメールがくるか心配だった。誰かにだまされたんじゃないかとか思っていたが、メールはすぐにきた。

『これがユリのアドだから、ちゃんと保存してねぇ♪』

『りょーかいですゞ』

ただ、この日は時間も遅かったため、すぐにどちらからともなくメールが切れた。

翌日以降も何度かメールをした。だが、学年が違っていたせいか、メールが長く続くことはなかった。ただ、なぜかわからないが、俺は確実にユリのことが気になるようになった。

そんなある日、ユリから1通のメールがきた。

『コウキに会ってみたいなぁ☆彡ダメ？』

俺は返信に迷った。

「…俺も会いたいけど、想像と違ってたら俺もユリも嫌だろうなぁ。…ケド、やっぱ会ってみたいかな（笑）」

『…いいっすょ。いつ、どこで会います？』

『コウキが暇なときでいいょ（笑）』

『んじゃあ、明後日の放課後、教室でいいっすか？』

『いいょ☆彡ちゃんといてょ（笑）』

『ユリさんこそ、ちゃんときてくださいよ（笑）』

『わかってるから☆彡じゃあまたね♪』

『でわっ。』

「明後日かぁ…。」

その日、俺は期待と不安が混ざった、なんともいえない気分のまま意識がきれた。

ユリと会う日、俺はいつもと違っていたらしい。先輩や友達に

［なんかいいことあんの？］

と、よく言われた。

俺は感情が表に出やすいのだろうか。

…そんなことは関係ない。ユリと会うことにはかわらないのだから。

その日の部活が予定よりも早く終わり、俺は教室で待っていた。

「会ったら何話せばいいんだろ？てか、嫌な顔されたらどうしよ…」

とか、1人考えていた。

ガラガラガラッ

ハッとしてドアのほうを見ると、1人の女性が立っていた。ユリだ。

『こっ…こんばんわっ』

『そんなに緊張しないでよ（笑）』

これがユリとの初めての出会いだった。

2. 告白（前書き）

1. の続きです

2. 告白

『ん？どしたの？』

『……ハッ』

気がついたらユリに見惚れてた。可愛いとかきれいとか言われそうな顔ではなかったが、なぜかボーッと見続けてしまった。

『い…いやっ、なんでもないっす』

『私の顔になにかついてるの？』

そういって手で顔を払う仕草、その一挙手一投足を見逃さないようにしていた。

『ならいいんだけどさぁ』

『そですよ（笑）てか、なんか初めて会った気がしないんですけどｗｗｗｗ』

『そりゃ、メールである程度は教えあってたからね（笑）』

ユリは、メールのときと話してるときねノリがほとんどかわらない。俺は、かなり違うらしいが…。

『ぁっ、そろそろ迎え呼ばなきゃ』

『ちょっと遅くなりましたね。すいませんでした』

『気にしないで☆彡楽しかったから（笑）』

『…迎えが来るまで一緒にいていいですか??『いいケド、なんで?（笑）』

俺は心の準備をしたかったのだ。
少し前に、ユリから好きな人がいて、その相手は1コ下だということを聞いていたからだ。こんなことを言われたら、十中八九俺のことだと思うだろう。そして、少しばかり自信もあった。

だから俺は初めてユリに会ったその日に

『好きだ』

と言ってしまった。
運命を感じたのだ。

だが、ユリの反応は思っていたのとは違っていた。

『えっ、いきなり?まだ会ったばっかりじゃん。てか、そんな…えっ…』

『あっ、いや、返事は後ででいいですから。気をつけて帰ってください。』

『あ、うん、ありがと』

ユリのテンションが明らかに下がっているのがわかった。
どうやら判断を誤ったらしい。…当たり前だ。普通、会ったその日に告白するなんてありえないだろう。
そして、ユリが好意を寄せてるヒトが俺ではないという可能性が高まった。

次の日、ユリからメールが入っていた。
『明後日ひざの靱帯の手術があるから、今日から入院するんだぁ。暇だったらお見舞いにきてね☆彡』
『俺が行っても迷惑じゃないんですか？』
『当たり前じゃん（笑）むしろ来て欲しいし』
このメールでほぼ確信した。やはりユリも俺に好意を寄せてたんだ、と。
まだ返事も聞いていないのに、俺はいいほうにばかり考えていた。
『いつ行けばいいっすかね？』
『んー、明日これる？』
『余裕です（笑）じゃあ明日、授業が終わったら行きますから☆』
『うん、待ってるね』

この時は、これからの展開なんてまったく読めなかった。

3. 返事

「さてと、そろそろ行くか…」

帰る準備をして、ユリが入院している病院へむかった。

「ユリの返事はＯＫなんだろうなぁ…（笑）」

思わずにやけていた。

…まわりから見たらただの変な奴だろう。

だが、俺は気にしない。

―病院に着いた―

『何階に行けばいいっすか？』

総合病院のため勝手がわからない。俺はユリにメールをいれた。

『５階にきてぇ～』

すぐにユリから返事が来た

『りょーかいっすゞ』

間髪入れず返事を送り、エレベーターに乗った。

都合良く誰も乗っていなかったため、中にある鏡で自分の顔を見て

みた。
…にやけていた。気持ち悪いぞ、俺。
『今5階に着きましたけど、何号室ですか？』
『ぁ、5〇〇号室だょ。でも、まだ準備できてないから談話室にいて』
「…なんの準備だろ？ま、いっか。」
『わかりましたぁ。ぁ、あんまり遅くなれないんで、できれば早めにお願いします（笑）』
『すぐ行くから焦らせないでよ（笑）』
「どんな返事だろ？（笑）まぁ、悪い返事じゃなさそうだし…（笑）」
―おっと、そろそろ来そうだ。
『ごめん、結構待った？』
『いえ、全然待ってませんよ（笑）』
『そか（笑）ぁ、今日はお見舞いに来てくれてありがとね。』
『近いですし、気にしないでください（笑）』
―前に話したよりは普通に話せるぞ―

『そっかぁ（笑）ぁ、今日はあんまり遅くまでいれないんだよね？』

『まぁ、一応部活ありますんで…』

『そだよねぇ…』

『ええ…』

…沈黙。

…沈黙。

…沈黙。

『何か飲みますか？』

『んーん、いらぬぃ』

『ぁ、そですか』

…沈黙。

…沈黙。

…沈黙。

『…えっとぉ、この前のことの返事なんだけどぉ…』

―おっと、唐突だなぁ

『ぁ、はぃ、お願いします』

『…コウの気持ちは嬉しいんだけど、他に好きなヒトがいるんだよ

ねぇ…ごめんね…』

―え？あれっ？なんで？

『…あ、はぃ』

『ごめんね。でも、友達としては好きなんだよ』

―まだ整理つかないんですけど

『ありがとうございます』

『これからもメールしていい？』

『もちろんですょ』

―いいわけないだろ―

『よかった、ありがとね☆』

『お礼を言われる立場じゃないですよ（苦笑）』

…この後の話はまったく耳に入らなかった。ただ覚えているのは、ユリが笑顔だったということだ。

気がつくと、俺は病院をでていた。

「…今までの、あの思わせ振りなメールはなんだったんだろ」

…12月の寒さが肌にしみた。

4. 葛藤

あの日を境に、俺はますます無気力になった。冷静に考えたら至って普通のことなのに、あの時の俺は冷静さを失っていた。

「ぁぁ、忘れなきゃなぁ。でも、忘れれっかな…」

俺は何度と無くユリのことを忘れようとした。だがその度に、ユリへの想いがつのっていった。別のことを考えてても、気がつくとゆりのことばかりを考えていた。何度も連絡を取りたいと思った。しかし、フラれたのだから、俺からメールすることはなかった。

そんな悶々としていたある日、ユリからメールがきた。正直、嬉しい反面、忘れさせてくれないいらだちも少なからずあった。

『手術は無事成功☆彡ただ、やることなくてすごく暇ぁ』

『よかったですね。そりゃまぁ、しょうがないですよ』

…唯一の繋がりであるメールを、切りたい気持ちと切りたくない気持ちが葛藤した末にでた答えがこの返信だった。成功したのは喜んでるが、俺はなにもしてあげられないというこの返信だ。

俺の気持ちを知ってか知らずか、ユリからの返信はすぐにきた。

『どーしたー？元気ないぞー？元気がないコウは嫌いになっちゃうぞ（笑）』

…むしろそうなってくれたほうが、諦められるかもしれない。

『全然んなことないっす（笑）』

…無理だった。諦めることなんてできなかった。…ただ俺が臆病だっただけかもしれない。

『ならいいケド（笑）てか退院したら、コウと遊びに行きたいなぁ☆彡』

…俺も行きたい。けど、付き合ってもいないのに、2人だけで遊びに行くのっていいのか？ユリが本当に好きなヒトに、俺と一緒にいたことがばれたら、ユリはいったいどうするんだ？もしかしたら、俺が恨まれるんじゃないか？という葛藤が心の中で起こった。

『いいっすねぇ、どっか行きますか？（笑）』

結局、俺はユリと遊べるという誘惑に勝てなかった。

『ボウリング行きたい（笑）』

『もちろんいいっすよ』

『それじゃあ、詳しいことはまた後でね（笑）』

『わかりましたぁ』

…一緒に遊べることは嬉しかったが、素直に喜べなかった。

「ユリにとって、俺ってどんな存在なんだろ。結局はただの友達でしかないのか？…まぁ、少しは前進したのかな。」

…もしかしたら、ユリの気持ちが俺のほうにむいてきたのかもしれない。そんな考えすら持つようになってしまった。

数日後、ユリからメールがきた。

『２３日退院だから、２５日でいい？』

『いいですよ』

『じゃあ１１時に現地でね。退院祝いよろしくね（笑）』

『了解しましたゞ（笑）』

遊ぶ日が決まった。そして、俺の気持ちも決まった。この日にもう１度ユリの気持ちを確かめてみよう、と。

5．墓穴

…２５日。
今日はユリと遊ぶ日。そして、ユリの気持ちをもう一度確認する日だ。

「１１時待ち合わせだから、まだ１５分くらいあるなぁ」
どうやら俺が先に着いたみたいだ。
やはりそわそわしてしまう。最後の彼女と遊んだ日以降、女性と遊ぶということが久しくなかったのだ。

『待ったぁ？（笑）』

…ユリが来た。
私服姿がとてもよかった。

『いえ、さっき着いたばかりですから（笑）』

時計を確認すると、１０時５５分だった。

『てか、ユリさんも充分早いですよ（笑）』

『だって、楽しみだったんだもん♪』

『俺もです（笑）あ、とりあえず受け付けしちゃいますか？』

『うん、よろしくね（笑）』

…結局４ゲームもやってしまった。でも、ユリが楽しそうだったからよかった。

［２８００円になります］

『１人１４００円だね』

『いや、ユリさんの退院祝いってことで、今日は俺が全部出しますよ（笑）』

『いや、それは悪いよ…』

『いいからいいから、気にしないでください（笑）』

『…優しいね☆彡』

『そんなことないっすょ（笑）それより、お腹すきません？』

『すいたぁ（笑）どっか食べにいこっか？』

『俺はどこでもいいですょ』

『んー、じゃあまるまつでいいかな？』

『ＯＫっす（笑）』

…どちらも移動手段がないが、さほど遠くないため、徒歩で移動した。

『…ユリさんって、俺のことどう思ってるんですか？』

俺はいきなり聞いてみた。

『ぇ？どうって…。嫌いだったら一緒に遊ばないよ（笑）』

『それは好きってとらえてもいいんですか？』

『好き…ってのとはまた違うかなぁ…』

…ユリからは、あいまいな返事しか返ってこなかった。だから俺は、おもいきってさらに聞いてみた。

『…ユリさんが好きなヒトって、俺とは全然違うタイプなんすか？』

『ん…やっぱりそういうのって気になる？』

『そりゃぁ、まだユリさんのこと諦めてませんから。』

『そっかぁ。…タイプは違うよ。全然。』

『やっぱり。…かなり好きなんですね。』

『…うん。』

…沈黙。

『…でもね、正直あんまり相手にされてないんだぁ。メールもすぐ切れるし…。だから、ユリの中でコウの存在も大きくなってるんだぁ…』

…あれ？これはチャンスなのか？…頑張れ俺！！

『まぢっすか？…でも、やっぱり中途半端はよくないっすょ。ちゃんとぶつからなきゃダメですよ。自分の気持ちを伝える前に、弱気になっちゃだめですよ。』

…俺は何を言ってるんだ？なぜユリを励ましているんだ？ユリの中で俺の存在が大きくなってるってことは、押せば付き合えるんじゃないのか？…

『…そだよね。諦めるのは早いよね（笑）てか、なんで励ましてるの？ウケるんだけど（笑）』

『ですよね（笑）なんで励ましたんだろ？（笑）』

…これで、ユリがアタックするまで俺は応援することになった。ただ、未練がある状態で付き合ったとしても、長くは続かないだろうから、この選択は間違っていなかったのかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0987c/

ing(進行形)

2011年1月29日02時43分発行